

フランス語の否定辞 rien の移動について

西野清治

[キーワード] 否定辞, 移動, 強勢

概要

フランス語では、目的語は本来動詞の後に位置する。しかし、フランス語の否定辞 **rien** が他動詞の目的語であるとき、動詞が過去分詞になっていると、**rien** はその過去分詞の後ではなく、前に置かれる。このときの **rien** は名詞ではなく、副詞的なものとしてとらえられるかもしれないが、そのような見方にはいくつかの不都合な点がともなう。我々は、複合時制などにおいて過去分詞の直前に置かれる **rien** は、その過去分詞の目的語であり、目的語の本来の位置から過去分詞の前に移動してきたと仮定する。移動の理由は、**rien** が、無標の場合には、強勢が置かれにくいという特徴を持ち、そしてこの特徴は形態的なものであり、この形態的な特徴が **rien** の移動の原因となっていると仮定する。このように考えることで、**rien** が過去分詞の前に現われることが、極小主義の考え方に沿って説明されうるということを示す。¹

1. 問題点と分析の枠組

1.1. フランス語の否定辞

フランス語の **rien** 「何も (…ない)」と **personne** 「誰も (…ない)」

は、意味的にも統語的にもよく似ている：

- (1) Je ne mange rien. 「私は何も食べない」
I Neg. eat nothing
- (2) Je ne vois personne. 「私は誰も見ない／誰にも会わない」
I Neg. see nobody
- (3) Rien n'est arrivé. 「何も起こっていない」
nothing Neg. is arrived
- (4) Personne n'est venu. 「誰も来なかった」
nobody Neg. is come
- (5) Tu as mangé quelque chose ? — Non, rien.
「君は何か食べた？—いいえ，何も」
you have eaten something no nothing
- (6) Tu vois quelqu'un ? — Non, personne.
「君は誰か見える？—いいえ，誰も」
you see somebody no nobody

しかし、複合過去の文のように、動詞が過去分詞の形をとるときに違いが現われる。すなわち、**rien** は過去分詞の前に置かれるのに対し、**personne** は過去分詞の後に置かれる：

- (7) Je n'ai rien mangé. 「私は何も食べなかった」
I Neg. have nothing eaten
- (8) *Je n'ai mangé rien.
- (9) Je n'ai vu personne. 「私は誰も見なかった」
I Neg. have seen nobody
- (10) *Je n'ai personne vu.

ここで示されたように、**rien** は一見したところ通常の目的語の位置から離れて、別の位置に移動しているようにも見える。² 以下で、この現象をどのようにとらえたらよいのか考えてみたい。

1.2. 理論的背景

1.1. で見た問題について、極小主義 (Chomsky 1995) で提案されている考え方に沿って分析する。この理論をごく簡単にまとめるとつぎのようになる：文は併合 (merge) と移動／牽引 (move / attract: 以後、便宜上、「移動」という表現を用いる) という 2 種類の操作によって作られる。まず、ある文を作るのに必要ないくつかの要素を語彙目録から選び出す。それらの要素には、音韻、意味、統語構造などに関する情報があらかじめ備わっている。選び出された要素の集まりの中から、2 つ取り出して結びつける (併合する)。これで、一つの統語構造体ができあがる。次に、もう一つ要素を取り出して、すでに作られてあるこの構造体に併合し、新たな構造体を作る。このような操作を必要な回数だけ行くと、文が形成される。また、途中、必要に応じて、何らかの要素が、最初に導入された位置から別の位置へ移動することもある。

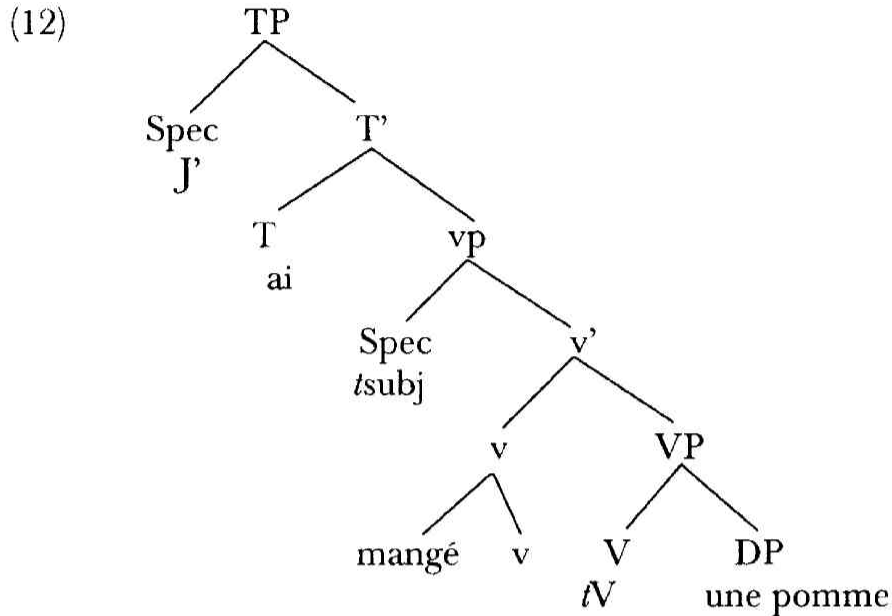
文法的なレベルとして、LF と PF がある。LF は概念・意図体系とのインターフェイス (文の意味を解釈するレベル) であり、PF は調音・知覚体系とのインターフェイス (文の音声化のレベル) である。併合や移動は、要素の素性にもとづいて行なわれる。要素の素性には、インターフェイスレベルで解釈可能なものと、解釈不可能なものがある。解釈不可能な素性は、派生の途中でしかるべき位置において照合され、削除されなければならない。³ 要素の移動は、このような素性の照合のためだけに行なわれる。また、移動には、実際に音声上に現われる顕在的 (可視的) なものと、音声的には知覚できない潜在的 (不可視的) なものがある。そして、移動はできるだけ短い距離の移動でなければならない。

1.3. 基本的な句構造について

本稿では、概略、以下のような句構造にもとづいて、rien を含んだ文を分析する：動詞が他動詞の場合、主語は vp の指定部に導入され、そこで動作主という意味役割を付与される。v は VP を補部としてとる。vp は T(=Tense) の補部となる。⁴ 次の (11) の派生を考えてみよう：

(11) J' ai mangé une pomme. 「私はりんごを一つ食べた」

I have eaten an apple



下の VP から見ていくと、過去分詞 **mangé** の痕跡である **tV** から **une pomme** が被動者 (patient) の意味役割を付与される。**mangé** は **v** に移動 (付加) する (二重目的語構文, 副詞の位置などの分析のため, そのように考えられている)。次に, **vp** の指定部 (Spec=specifier) で主語の **J'** は動作主の意味役割を付与される。次に, **T** に助動詞の **ai** が導入される (または, **ai** は下の方から移動してくるとも考えられるが, そのことについてはここでは問題にしない)。主語の **J'** は, **T** の EPP 素性を照合するために, **vp** 指定部の位置から **TP** 指定部へと繰り上がる。そこで, **J'** と **T** の主格の素性も照合できる。⁵ 目的語の **une pomme** の目的格は, **VP** と **TP** の間のどこかで照合されると考える。そこへは, 目に見える形の移動ではなく, 潜在的な移動によって素性だけが繰り上がると考える。

2. rien の移動

2.1. 動詞の補部位置に生成される名詞として扱うことの利点と問題点

本稿では, (7) に見られる **rien** を NP であるとみなして, 動詞の補部に生成されるものとしてとらえてみることにする。そして, そのような仮

定の下で、どのような分析が可能であり、どのような問題があるかを考えることにする。まず、(1) の構造を見てみよう：

(13) [NegP Je_i [Neg' ne [TP t_i [T' mange_i [vp t_i [v' t_i-v [VP t_i rien]]]]]]]]

ここでは、動詞 *mange* は VP 内から出て、v に付加した後、T に付加している。ne は、TP を補部としてとる NegP の主要部の位置にあるものと考え (Pollock 1989, Zanuttini 1996)。本稿では、ne が占める位置の問題については深く立ち入らないことにする。この移動は、時制に関する素性の照合のためである。主語 Je は vp 指定部の位置に導入されたのち、EPP 素性、格素性等の照合のために、TP 指定部へ繰り上がっている。目的語の rien は、LF でしかるべき位置に移動し、そこで格素性の照合が行なわれる。

次に、複合形の文 (7) の構造を見てみる⁶：

(14) [NegP Je_i [Neg' n' [TP [T' t_i ai [vp t_i rien_k [v' mangé_i-v [VP t_i t_k]]]]]]]]

ここでは、主語 Je は (13) のときと同様、vp 指定部から TP 指定部へ繰り上がる。動詞 (過去分詞) は、v に付加するところまでしか動かない。T には助動詞 ai があるからである。(13) との大きな違いは、rien が顕在的に (目に見える形で) 繰り上がっていることである。なぜ顕在的に繰り上がるのか、どの位置に移動しているのかということを考えなければならない。

(7) における rien が、動詞 (過去分詞) の補部に生成される目的語であり、そこから過去分詞の前に可視的に移動していると考えることには、次のような利点がある：

- rien が主語になることもある場合があるという事実との整合性がつきやすい。つまり、rien を名詞的なものとしてとらえることにより、rien が目的語になったり、主語になったりすることに対し自然な説明ができるということである。
- 上の例でのように、mangé のような動詞は、その目的語に意味役割 (被動者) を付与する。rien が VP 内の目的語の位置に生成さ

れば、動詞が付与すべき意味役割の受け皿になる。

- *manger* のような動詞は、格に関する素性（対格に関する素性）をもっていると考えられる。その素性は目的語との間で照合される必要がある。したがって、*rien* が目的語として生成されれば、動詞の対格素性を照合することができる。
- 上の例 (1)~(4) で見られるように、意味的にも、また一部分をのぞいては統語的にも *rien* と似ている *personne* は名詞的な振る舞いをする。*rien* を、目的語として生成される名詞的なものであるとみなしておけば、*rien* と *personne* の類似性を説明しやすくなる。
- (15) における *rien + de + 形容詞* という連続要素で、*de + 形容詞* の部分だけが過去分詞の後に残ってしまうということについて説明しやすくなる。つまり、(15) に見られる形は、*rien* を含む連続要素がもともと動詞（過去分詞）の後に生成され、そこから *rien* だけが過去分詞の前に移動した結果できた形であると説明できるということである。

(15) *Je n'ai jamais rien mangé d'aussi délicieux que ça.*

I Neg have never nothing eaten as delicious as that

「私はあれほどおいしいものを何も食べたことがない」

(現代フランス語法辞典 p.282)

(16) **Je n'ai jamais mangé rien d'aussi délicieux que ça.*

I Neg have never eaten nothing as delicious as that

(17) *Je ne connais rien de plus passionnant que le football.*

I Neg know nothing of more exciting than the soccer

「私はサッカーほどおもしろいものを何も知らない」

このような考え方とは異なる考え方をとるとすると（例えば、*rien* が最初から過去分詞の前に生成されると考えることなど）、*rien + de + 形容詞* をひとまとまりの要素とみなしにくくなる。(17) の文を見た時、*rien de plus passionnant* が直観的にはひとまとまりの要素であるように見えるということと反することになってしまう。次の例で見られるように、*rien* は前置詞の目的語になることができる：

- (18) *Ça ne sert à rien.* 「それは何の役にも立たない」
That Neg used for nothing
- (19) *J'ai eu cette maison pour rien.* 「私はこの家をただで手に入れた」
I have had this house for nothing (朝倉季雄「フランス文法事典」)
- (20) *Dieu a créé le monde de rien.* 「神は無からこの世を創造した」
God has created the world from nothing (Ibid.)

この事実との整合性という観点からすれば、*rien* が名詞的なものとして動詞の補部の位置に生成されるという見方には利点があることになる。

我々が仮定しているように、(7)における *rien* は、名詞的な目的語として動詞（過去分詞）の補部の位置に生成され、そこから過去分詞の前に移動するとした場合、次のような問題が出てくる：

- フランス語では、通常、人称代名詞以外の目的語は動詞の前には置かれない。極小主義の理論に沿って言えば、目的語は、LF で不可視的に（素性だけが移動するということ）しかるべき位置に繰り上がり、その位置で格などに関する素性の照合がなされる。なぜ *rien* は可視的に移動するのか。類似した要素である *personne* は可視的に移動しないのはなぜかという問題に答えねばならなくなる。
- *rien* が、動詞の補部の位置からどの位置に繰り上がるのか。

2.2. rien の移動の性質

動詞の目的語として生成された *rien* が、動詞の前に移動するという仮定をするならば、*rien* の移動の標的となる機能範疇が何であるのかを考えなければならない。考えられるのは AgrOP と vp である。しかし、Agr はその存在の根拠があまり強くはない (cf. Chomsky 1995 p.349)。標的となる機能範疇は vp であると仮定しよう。さらに、Chomsky (1995 第 4 章) で考えられているような多重指定部を想定することにする。vp の指定部の一つには主語が生成されるので、もう一つ別の指定部

に目的語が繰り上がってくると考える。⁷ この繰り上がりが、主語が生成される前か後ということは問題になるだろうか。同じ **vp** の中なので、厳密循環の原則にも違反しないのではないか。もちろん、主語が **TP** の指定部に繰り上がる前に、目的語が **vp** 指定部に繰り上がっている必要はある。もうひとつ考えられるのは、**A'**移動のような種類のもので、目的語の **rien** が **vp** に付加するということである。いわゆる **quantifier raising** のようなものである。しかし、**QR** が、意味解釈のための作用域を形成するためのものであるとして、それは **LF** でおこなわれてもさしつかえないのではないか。ただし、**Hornstein (2001)** によれば、**A'**移動は **LF** では存在せず、**A** 移動で代用されることができ、**A'**移動は形態論的に駆動される、**PF** レベルのものにかぎられるという。⁸ **rien** が過去分詞の前に現われるという現象が、ここで言われているような、形態論的に駆動された、**PF** での**A'**移動のようなものである可能性も否定できないかもしれない。

理論的に、特に問題なのは、目的語であるところではみなされている **rien** が可視的に移動することである。通常、移動の対象になるのは素性である。素性の移動は可視的に、つまり **PF** で行なわれるよりも、不可視的に、つまり **LF** で行なわれた方がよい。しかし、ある機能範疇がなんらかの強素性を持っていると、その強い素性は **PF** で照合・削除されている必要がある。**PF** で素性だけが移動すると、音声化できない恐れがある場合、範疇全体が移動する必要がある。**spell-out** 以前に、ある要素が強い素性の照合にかかわる場合、その要素は素性照合のため **PF** で可視的に移動する必要がある。したがって、**rien** が可視的に、おそらく **v** の前のどこかに移動しているということであれば、**v** がなんらかの強い素性を持っているということになる。

Chomsky(1995 p.222) にしたがって、移動の引き金になる素性は形態論的なものであるとする。例えば、英語の **T** の **V** 素性は弱いので、**PF** で照合される必要はない。**be / have** 以外の動詞は可視的に **T** に移動する必要がない。一方、屈折体系が比較的豊かなフランス語の **T** の **V** 素性は強いので、フランス語の動詞は **PF** で可視的に移動する。⁹ では、**v** は、**rien** とのかかわりにおいて、どのような強い素性を持つと考えたらよいのであろうか。また、**rien** は、なんらかの強い素性の照合にかかわることができるような、形態的に目だった特徴をもつのだろうか。強いていえば、

音節的に短いといえるかも知れない。しかし、普通の目的語の名詞では、たとえそれが短くても、動詞の前には位置しない。現代フランス語では、rien は、性、数、人称、格などに関して、なんら表立った形態的な特徴を示さないように見える。

rien が動詞の前に移動するように見える場合、動詞の形が過去分詞であるということに関係があるだろうか。次にみるように、動詞が不定形であるときも、rien はその前に現われる：

(21) Ne rien manger, c'est... 「何も食べないこと、それは・・・」

Neg nothing to eat, it is...

(22) *Ne manger rien,...

(23) [NegP PRO [Neg' Ne [TP [T' {vp [v' rien_i manger_i [VP [V' t_i t_k]]]]]]]]

仏語で être, avoir 以外の動詞が不定形になる時 T に繰り上がらないとすると (Pollock, 1989), 上の例で見ると、やはり rien は v の前になければならないのであり、動詞が過去分詞であろうと不定形であろうと、T のところにまでは上っていない動詞の前になければならないのである。一方、personne は、動詞が過去分詞形であるときと同様、不定形であるときにも、動詞の後に現れる：

(24) Ne voir personne, c'est... 「誰にも会わないということ、それは・・・」

Neg to see nobody, it is...

(25) *Ne personne voir, c'est...

このようなことから、目的語の rien の移動が、過去分詞形となんらかの直接的な関連を持つということではなさそうである。

目的語の rien が、対格素性を照合するために v の前に可視的に移動しているという見方はどうであろうか。v は対格素性を持ち、それが目的語の対格素性と照合されるということであるとしても、仏語では対格照合のための移動は不可視的でよい。つまり、目的語の対格素性だけが LF で v の前に繰り上がり、そこで照合される。目的語である rien が過去分詞の前に位置しなければならないということが、対格の照合のためであるとしたならば、rien が格などの屈折形態の面で、他の名詞よりも特徴的

である必要があるのではないか。しかし、そうは見えない。

朝倉 (1985) において、*rien* が強調される時、*v* にある動詞の後ろに残ったままになるという例が示されている¹⁰：

(26) *Sans rien dire* 「何も言わずに」

without nothing to say

(27) *Sans ajouter rien* (強調) 「何も付け加えずに」

without to add nothing (朝倉季雄「フランス文法事典」p.327)

強調されると、*rien* が *v* の前に来ないのである。この現象にもとづいて、非強勢形という特徴が形態的特徴であると考え、これが可視的移動に関係していると仮定する。*rien* は、それ自身が形態的特徴として、非強勢という特別な特徴を持つと仮定する。*rien* は形態的に強勢が置きにくいということである。*personne* は、このような特徴を持たないと考える。一方、フランス語の *v* は、非強勢（形態的に強勢を置きにくいということ）にかかわる素性を持ち、この素性は強い素性であると仮定する。これは、*v* の後に非強勢という形態的特徴を持つ要素があるとき、その要素との間で照合がおこなわれるものであると仮定する。

強勢は韻律的なものであるが、語の形態と無関係なものではない。フランス語の人称代名詞は、強勢形と非強勢形という体系を持ち、これが形態的に表れている。さらに、強勢形と非強勢形の人称代名詞は統語的に異なる分布を示す。

Hornstein (1995 p.153) によれば、*landing site* が決まっている場合には、形態的な動機で移動が誘発されているとみなせるといふ。たとえば、*wh* 句などは必ず CP 指定部に移動する。*wh* 句は形態上の体系を持っている。また、上記の仏語の人称代名詞も形態上の体系をもっており、かつ、移動先（正確にいうと接辞化か）も TP の前の位置というように決まっている。*rien* もどこにでも移動するのではなく、過去分詞の前（または、恐らく *v* の前）というように、移動先の位置が決まっている。

次の例で見られるように、*rien* は前置詞といっしょに過去分詞の前に移動することはできない：

(28) *Il n'a cru à rien.* 「彼は何も信じなかった」

he Neg has believed to nothing

(29) *Il n'a à rien cru.

(30) *Il n'a rien cru à.

一般的に前置詞の後の位置は強勢が置かれる位置であると考えてみる。人称代名詞が前置詞の後に置かれる時は、強勢形の形をとる必要があるので、そのように仮定することは可能であると思われる。次の例では、*moi, toi* は強勢形であり、*me, te* は非強勢形である：

(31) *pour moi* 「私のために」

for me

(32) **pour me*

(33) *à toi* 「君に」

to you

(34) **à te*

上の (28) で、*à* の後にある *rien* には強勢が置かれているとすると、*rien* は非強勢ではなくなるので、可視的に過去分詞 *cru* の前に移動する必要があるということになる。¹¹

しかし、接辞化とどこが異なるのか、という問題は残る。接辞化と本質的には同じ現象であると考えられなくもないが、なぜ、人称代名詞の目的語の接辞は *T* につき、*rien* は *v* につくのかという点は不明である：

(35) **Je ne rien ai mangé.*

I Neg nothing have eaten

(36) *Je l'ai mangé.* 「私はそれを食べた」

I it have eaten

(37) **J'ai le mangé.*

I have it eaten

また、音韻的に *rien* と似ている普通名詞、例えば *faim* などと同じような振る舞いをしないのはなぜかという問題も残る：

(38) J'ai eu faim. 「私は空腹を感じた」

I have had hunger

(39) *J'ai faim eu.

2.3. 別の見方について

ここまで、(7) のような文に現われている **rien** は、動詞の補部に目的語として生成され、それが移動したものとみなすことができるかどうかということについて考えてきた。他の見方としては、(7) の **rien** を量化の副詞としてとらえるということも考えられるように思える。すなわち、副詞としての **rien** が初めから **vp** の前の何らかの位置に生成されると仮定する。この考え方の利点としては、上で問題になった、**rien** がなぜ移動するのかという問題が生じないということである。しかし、他の問題がいくつか出てくる：

- **rien** が副詞であるとする、(7) では、動詞の持つ格素性と意味役割の受け皿がなくなってしまう。
- なぜ、**rien** は **vp** の前にだけ導入されるのか、**TP** の前にはなぜ生成されないのか。つまり、なぜ **vp** を量化できて、**TP** を量化しないのか。
- **rien** + 過去分詞 + **de** + 形容詞というかたちにおいて、最初から **rien** が過去分詞の前に位置しているとする、**rien** が **de** + 形容詞とつながっているということを説明しにくくなる。
- **rien** が主語になったり、前置詞の目的語になったりするということから、**rien** が名詞的な特徴を示しているということがある。しかし、**rien** を副詞としてあつかうと、この事実を統一的に説明することができなくなる。

rien が初めから動詞の前に生成されるとする見方についての研究を本稿で本格的に扱うことはせず、別の機会に行うことにする。

3. まとめ

本稿では、過去分詞、あるいは不定形の前に現われる rien は、それらの過去分詞などの目的語として生成されたものが、v の前に可視的に移動したものであると仮定した。フランス語では、v が、非強勢に関するなんらかの強い素性を持ち、その照合のために rien が移動すると考えた。このような考え方は、今の段階では ad hoc なものであるが、強勢と移動との関連性を示すような他の事例が今後報告されれば、このような考え方に対する支持は強まるであろう。もちろん、そうならない可能性もある。

また、動詞の周りに現われる要素、特に副詞類の位置などのかかわりについても、調べることが望まれる。tout などの量化表現と比較してみることも、同様である。

注

1. この研究は、平成 12 年度神奈川大学共同研究奨励助成金にもとづいて行なわれた。

また、この研究にかかわるいくつかの点についてコメントを与えてくれた、神奈川大学対照言語学研究会のメンバーの方々に感謝する。

2. rien の持つこのような特徴と似ている面を持つものとして、tous が思いおこされるかもしれない。しかし、tous は rien と似ている面もあるが、異なる面もある：

(i) les garçons sont tous partis à la guerre 「少年達は全員戦争へと出発した」
the boys are all left to the war

les garçons sont partis tous à la guerre (Kayne, 1977 の例文 (1))

この例で見られるように、rien と同様に過去分詞の前に置かれることもできる。しかし、過去分詞の後に置かれることもでき、この点で rien と異なる。また、Kayne (1977, p.13) が指摘しているように、tous の後に de がくることはない。この点でも rien とは異なる (ただし rien de の後にくるのは形容詞であるが)。

Kayne (1977, p.17) が指摘しているように、目的語に tous がついている場合で、目的語が代名詞ではない名詞であるときには、tous は目的語の位置から動かない：

(a) *elle va tous lire ces livres. 「彼女はこれらの本を全て読もうとしている」
she goes all to read these books

(b) *elle a tous lu ces livres 「彼女はこれらの本を全て読んだ」

she has all read these books

(c) **elle a tous voulu lire ces livres* 「彼女はこれらの本を全て読みたかった」
she has all wanted to read these books (Kayne, 1977 の例文 (10))

(d) *elle a voulu les lire tous* 「彼女はそれらを全て読みたかった」
she has wanted them to read all

(e) *elle a voulu tous les lire* 「彼女はそれらを全て読みたかった」

(f) *elle a tous voulu les lire* 「彼女はそれらを全て読みたかった」

(Kayne, 1977 の例文 (8))

3. 例えば, DP の範疇素性, ϕ 素性などは解釈可能な素性である。一方, 解釈不可能な素性には, DP の格素性, T の ϕ 素性, 格素性, EPP 素性などがある。範疇素性とは, 名詞, 動詞などのような範疇を表すものである。 ϕ 素性は人称, 性, 数などに関するものである。格素性は主格, 目的格などの格関係を表すものである。EPP 素性は, 節には主語が必要であることを表す。
4. 句構造を表すやり方として, Chomsky (1995) では, 範疇記号を用いない Bare Phrase Structure が提案されているが, 本稿では便宜上範疇記号で表すことにする。
5. T の EPP 素性を照合するために主語が繰り上がるというやりかたは, 格素性の照合に還元できるのではないかという議論もある (Roger Martin, 1999)。
6. Pollock (1989) でも, rien が過去分詞の前に移動してくるという分析がなされているが, rien は副詞としてあつかわれている。また, rien の移動先は VP 内の前のほうの位置になっている。
7. 今, 目的語の rien が vp の指定部へ移動すると仮定した。ここで, 構造保持制約に関する問題が出てくる。rien + de + 形容詞という連続において, rien が主要部であり, したがって最小投射範疇であるとすると, v への付加しか認められないことになる。この問題については, 本稿では満足のいく解答をだすことができないので, 深く立ち入らないことにする。
8. Hornstein の提案は, QR という考えを方をせず, 格素性照合のための A chain と copy and deletion 操作により, 量化の作用域の説明をするというものである。主語が目的語を構成素統御するときもあるし, 目的語が主語を構成素統御することもある。主題役割の付与が VP という lexical shell 内で行なわれ, 格素性のチェックがその外で行なわれるということを利用したやり方である。
9. John often kisses Mary.
*John kisses often Mary.
Jean embrasse souvent Marie. 「ジャンはしばしばマリーにキスする」
Jean kisses often Marie
*Jean souvent embrasse Marie. (Pollock, 1989)
おおざっぱに言って, 上の英語とフランス語の文では, どちらにおいても主

語の後に T があると考え。英語では T が動詞を引き寄せる力が弱いので、「重い」一般動詞は、副詞 often を越えて T まで繰り上がることができない。一方、フランス語では T が強いので、動詞は副詞 souvent を越えて T の位置に繰り上がる。

10. フランス人インフォーマントにたずねたところ、(27) のような言い方はしないということであった。しかし、判断がむずかしいということであった。
11. または、単に、(29) が非文であるのは、à rien のような前置詞句が指定部の位置を占めることは許されないと規定することもできるかもしれないが、下の例に見られるように疑問詞をともなう前置詞句は CP の指定部に現われることができるので、前置詞句が指定部に現われることができないと単純に規定することはできないように思われる：

A quoi pensez-vous ? 「あなたは何について考えていますか」

to what think you

[CP A quoi [C' pensez [TP vous [.....]

参考文献

- 朝倉季雄. 1955 (1985 第 25 刷) 『フランス文法事典』白水社。
- Chomsky, N. 1995 (Third printing, 1997). *The Minimalist Program*. Cambridge, London: The MIT Press. 外池滋生・大石正幸 (監訳) 『ミニマリスト・プログラム』1998. 翔泳社。
- Hornstein, N. 1995. *Logical Form From GB to Minimalism*. Oxford, Cambridge: Blackwell.
- Hornstein, N. 1999 (Second Printing, 2001). Minimalism and Quantifier Raising. In Epstein, S.-D. & Hornstein, N. (eds.) *Working Minimalism*. Cambridge, London: The MIT Press, 45-75.
- Kayne, R.-S. 1975. *French Syntax*. The MIT Press. (Attal, P(traduction). 1977. *Syntax du Français*. Editions du Seuil.).
- Martin, R. 1999 (Second Printing, 2001). Case, the Extended Projection Principle, and Minimalism. In Epstein, S.-D. & Hornstein, N. (eds.) *Working Mini-malism*. Cambridge, London: The MIT Press, 1-25.
- 中村捷・金子義明・菊地朗. 2001. 『生成文法の新展開』研究者出版
- Pollock, J.-Y. 1989. Verb movement, Universal Grammar, and the Structure of IP. *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.
- Radford, A. 1997. *Syntax: A Minimalist Introduction*. Cambridge University Press.
- ポール・リーチ, クロード・ロベルジュ他. 1975 (1984 第 8 版). 『現代フランス語法辞典』大修館書店。
- Zanuttini, R. 1996. On the Relevance of Tense for Sentential Negation. In

Belletti, A. & Rizzi, L. (eds.) *Parameters and Functional Heads*. Oxford :
Oxford University Press, 181-207.